たちんぼ

「おかあしゃん、裸の人がバンザイして立ってる。」

あ、またか。と思った。
今年4歳になる娘は、何故か時折妙なことを言う。一般的に霊感と言われるモノをもっているらしい。
娘にはお友達ができなくなるから、他所では言ってはいけない、と言ってある。もちろん、私も聞きたくない。
夏の怪談や、オカルト雑誌でこういう話を聞かないではなかったが、実際、自分の子供が語り出すとは思ってもなかった。うちは先祖代々普通のサラリーマンなので、坊主も神主も商ってない。はっきり言ってありがた迷惑な才能だ。しかも、根が小心者で座右の銘が『身に余る富は自滅を招く』なもんだから、教祖や霊能者に祭り上げて一攫千金など思いつきもしなかった。
なので、祖先から受け継いだDNA『有事の際は逃げ惑う一般市民』を全うするための英才教育を施すように心がけている。こういった能力は、成長すれば無くなる。その言葉を頼りに、神童が地に落ちるのをじっくりと待つことにして何事もミステリアスに考えずポジティブに現実的に考えるようにしている。
ここで、同種のシンパである宗教に奔ってしまうと、一攫千金の身の程をわきまえない夢を見かね。。。いやいや、娘の将来に良くない。そう思って、見ただけで眠たくなるような分厚い児童心理などの本を読んだが、特に功を奏じなかった。
夜道でふいに『ねぇ、なんであの人、木にぶら下がってるの？プラ～ンプラ～ンしてるよ？』と、何もない所に向かって指をさされた日にゃあ！あんた！児童心理とか科学なんて、屁の突っ張りにもなりませんよ！
ええ！説明もできないし。
とりあえず、最初の内は愛情不足かと思い、一家総出で甘やかしたら図に乗りやがったんで、ゲンコツをくれてやっただけに終わった。それ以来、普通の生活を心がけている。
残念ながら能力に治まりを見ないが、特に何も変わるでなく、たまーに仏壇と会話をして来訪者をピタリと当てる日々を過ごしている。

最近治まってきたのかと安心していたら、これか、しかも家の中だと～。落ち着いて屁もできない。どうしたもんだかとは思うが、一応話を聞いてやらねばならない。
「裸の人？」
「うん、バンザイしてる。」
「どこで？」
「玄関のクツ箱の所」
「なんでそんな所に裸の人が立ってるのかな？今は冬だし寒いじゃない。見間違いじゃない？」
私はできるだけ理解を示しながら、現実世界に娘を引き戻すための努力をした。
「ん～、聞いてみてあげようか？おかあしゃん？」
すいません！私が悪うございました！そっちへ行かないで、こっちへ帰ってきてください！私は

あらん限りの力で首を横に振った。ついでに、ダンナと上の子供の即時帰宅を願った。
「き、今日はいいわ。その人がいなくなったら教えてね。」
「わかったけど、かわいいからずーっといてほしいな。」
「かわいい？」
だから、長居されたら安心して屁がこけ。。。いや、ジェネレーションギャップのせいか、最近若い子達がかわいいというものが理解出来ない。娘のかわいいも、それに類似するものなら迷惑な話である。
「うん、お目目がクリクリで大きくて、ほっぺたぷっくりしてるの。あ、背中に小さな羽根があるんだって」
裸。バンザイ。お目目クリクリ。羽根。

・・・・・キューピー？

　その晩、意を決して帰宅したダンナにクツ箱の裏を探らせた。すると、出るわ出るわ、給食用と思われるマヨネーズの小袋がどっさりと出てきた。
　久しぶりに、家中を震撼させるほどの怒号で上の子供を吊るし上げた。半泣きで謝っていたが、私の恐怖は彼の恐怖の比ではないと思う。男なら、マヨネーズぐらい飲み下さんか！！

　娘は、キューピーが消えてしまった事を、その後しばらく残念がっていた。